

華陽診療所開所 50周年を迎えて



高田 一朗
 (わらべ保育所施設長・
 元勤医協副理事長)

働者検診など働く者の立場に立った保健医療活動を旺盛に展開しました。

華陽診療所(開所時は「華陽民主診療所」)は、本年9月8日で開所50周年を迎えます。開所当時(1969年)は、健康保険の家族は5割負担、国民健康保険が5割から3割負担になった時期で、病気になることも負担が大きく医療機関にはかかりづらいう状況でした。そのような中、「たれでも安心して医療機関にかかれるように」と、岐阜の医学生、看護学生などが集まり、「岐阜市民連運動研究会(岐阜民医研)」を発足させました。その後、医療従事者、住民と力を合わせて、1969年7月27日「人格なき社団」岐阜健友会(現・医療法人岐阜勤労者医療協会)を設立し、同年9月8日、華陽民主診療所を開所しました。

50年前の岐阜健友会創立総会では「政府・自民党の人命無視の医療政策のもとで働く人びとの健康と医療の破壊がますます激しくなり、労働者、農民、医療従事者の苦しみが耐え難いものになっている中で、労働者、農民をはじめ勤労市民や中小企業家、生活保護者などいろいろな階層や集団の人々が生命と健康を守るために、自分たちの医療機関を持つことが切実な要求となっている」と民主診療所建設を呼び掛けました。建設発起人会は、ガリ版刷りの建設ニュースをかかえて建設資金を集めるために団体訪問、戸別訪問を繰り返しました。戸別訪問では大口は少なく、百円か二百円の寄付も多くありました。8か月で1,150万円の出資金、建設資金を集め、銀行からの借入れなしで土地と建物を取り得ました。

こうして、岐阜市祈年町に放置されていた四十六坪の縫製工場を改修して、玉置嘉輝医師と4人の常勤スタッフでスタートしました。当時、岐阜市内において結核登録率が二位、開業医も少ない華陽校区であったがゆえに岐阜での最初の灯をともし事になりました。

開所後は日常診療に加え、受診の中断対策、生活相談、老人健診・出張健診、老人医療費無料化運動、荒田川公害闘争、被爆者健診、紡績労働者健診など、結小中学校などに設置し、泊まり込みで急患に対処するとともに巡回診療にあたりました。

こうした中、華陽民主診療所は民間医療機関を代表し、NHKの報道番組に玉置嘉輝医師が出席し、この災害の公的責任と医療救済の問題を明らかにしました。

華陽診療所は、開所以来地域の住民の皆さん、健康友の会の会員の皆さんのご支援ご協力で医療・介護活動を広げてきました。そのことが、みどり診療所開所につながり、みどり病院、介護事業への展開になって広がってきました。

華陽診療所は、2回の新築リニューアルを行い、現在に至っています。



1976年9月 17号台風で長良川が決壊し大洪水

1976年9月、長良川の氾濫による水害が各地で発生しました。岐阜健友会と華陽診療所は直ちに、対策本部を設置して救援活動を開始しました。他県の民医連(山梨、静岡、長野、三重)と学生らにより、延べ180名の支援を受け、岐阜市内(黒野、安八町、墨俣町)の救援にいち早く入り延べ535名の被災者治療にあたりました。現地診療所を大垣女子高校、結小中学校などに設置し、泊まり込みで急患に対処するとともに巡回診療にあたりました。

友の会の役員、皆様の医療活動や地域に對する思いがひしひしと伝わってきました。50年という長い歴史の中、時には時代の変化に感わされながらも、大切なことを見失わずに現在まで「華陽診療所」をつないでいくことができます。



現在の華陽診療所

大切な事を見失わず

華陽診療所 事務長 松田 英史

1969年9月に開設した華陽診療所も今年で50年目を迎えました。私が就職して22年なので、私自身にとっても華陽診療所の歴史を半分計算になります。30年前に発行された「華陽診療所20年のあゆみ」という冊子を今に見返してみると、当時の玉置嘉輝所長を始め、職員の皆様、友の会の役員、皆様の医療活動や地域に對する思いがひしひしと伝わってきました。50年という長い歴史の中、時には時代の変化に感わされながらも、大切なことを見失わずに現在まで「華陽診療所」をつないでいくことができます。



華陽診療所口コモ体操教室



感謝祭のご案内

◎日時：10月26日(土)
10:00~14:00
◎場所：華陽診療所



ささやかですが、五十周年を迎えられたことに皆様へ感謝を込めて、華陽診療所「五十周年記念感謝祭」を企画しました。たくさん皆様のご来場をお待ちしています。

その画家のことは、ある番組を見るまでは知りませんでした。その画家の名は熊田千佳慕さん。放送は平成十六年で、当時九四歳、番組の名は「虫の村で生きる画家」▲熊田さんは主に児童書の挿絵に虫の絵を描いています。極めて写実的な描写です。彼は四八歳の時に、有名な『ファーブル昆虫記』に登場する虫をテーマに百枚の絵を描くことを決め、それ以来描き続け、九四歳までに五枚が完成しました。晩年になるにつれ一枚描くのにも二年かかっていた一枚は戦争で疎開した農家の納屋に住み続け、四畳半の部屋に毎朝やぐらこたつを置くことでアトリエの完成。そこから日常が始まります。しかし、すぐには描き始めることができず、創作意欲を感じるまでには長い時間がかかることがあります▲問題は彼がもしこのままのスピードで描き続けるとしたら、じつにもう一回彼の人生の長さが必要で、完成させるには絶望的な状況なのですが、それを考えることは打算に過ぎず、描いているその瞬間のいわば創作の喜びが、彼を突き動かしている源であるのかもしれない▲高齢者となっても、できなくなることを希望ではなく、できうる限りの希望、あるいは打ち込むことのできる課題を持ち続ける生き方が大切なのだという思いを強く感じます▲石川啄木についての講演をされた確田のぼる氏も、今年九一歳、まだ雑誌に啄木についての研究論文を発表されています▲熊田氏は、平成二年九七歳で亡くなられました。彼の作品は、『ファーブル昆虫記の虫たち』(小学館)全五巻で見ることができ、最近でも名古屋のデパートで作品展が開かれていました。(K)

